中３　　社会をとらえる「メディア社会をとらえる」

研究主題「確かな国語力を育むための国語教育の在り方」

日立市立台原中学校　小泉　　隆

１　はじめに

新学習指導要領改訂の経緯には，我が国の児童生徒の学力の実態として，「① 思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題，知識・技能を活用する問題に課題，② 読解力で成績分布の分散が拡大しており，その背景に家庭での学習時間などの学習意欲，学習習慣・生活習慣に課題，③ 自分への自信の欠如や自らの将来への不安，体力の低下といった課題」があることが挙げられている。

本校の生徒の実態も我が国の児童生徒の学力の実態と同様である。いわゆる読解力に課題のある生徒が多く，記述式問題等には手をつけない生徒も多く見られる。基礎的基本的な力が備わっていないため，「何をどう学習してよいかがわからない」「なぜそうなるのかわからない」と学習を放棄する生徒も見られる。したがって授業や家庭学習に対して意欲のない生徒が多く全国学力学習状況調査の結果では，ほぼ全分野に渡って全国，県平均よりも正答率が低い結果となっている。アンケート調査でも学習に対する関心意欲が低く家庭での学習時間は，平日平均で「３時間以上学習している生徒」が全国平均の半分以下の４．７％，「３０分未満からしていない生徒」が全体の５分の１強の２２．１％であった。

そこで，本校では，学校課題研究として「生徒の学ぶ意欲を高め，確かな学力を身に付けるための学習指導の推進」を研究目標に取り組んできている。

国語科においては，この研究目標を踏まえ，国語科の「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し，伝え合う力を高めるとともに，思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし，国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。」という目標に沿って教科経営を行うため，全国学力学習状況調査や県学力診断のためのテスト等の結果から分析を行った。その結果，学習の基礎基本に立ち返り，学習に臨む態度を身につけること，できたことは認め励まし，意欲を喚起することを根底に学習を進めることが必要であると考えた。「学ぶ意欲」を促し「確かな学力」を身につけてるまでには，大変な労力と時間が必要であるが，指導内容を該当学年で身につけて行かなくてはならないことも事実である。本事例は，こうした実態を踏まえて取り組んだ事例である。

《H22 県学力診断のためのテストで正答率の特に低い力》

	県との差
・常用漢字を書く力（訓）沿って	−18.9
・文脈に即して内容を読み取る力	−38.5
・話題をとらえて自分の考えをまとめる力	−20.6

２　研究の仮説

(1)　学習する内容と方法を明確にすることで，生徒の「学ぶ意欲」を高め学習の見通しをもって取り組むことができるのではないか。

(2)　楽しみながらテキストを読み，書く場面を増やすことで理解したことを適切に表現し，伝え合う力を高めることができるのではないか。

３　実践事例

(1) 学校全体での取り組み

①　「学習の手引き」の作成・活用

これまで使用してきた「学習の手引き」は，新入生を対象とした内容が中心であったため，学習環境開発部が中心となって，見直しと改良を行った。

９教科全ての授業への取り組み方を，授業前，授業中，授業後に分けて記述し，生徒が予習，復習にどのように取り組めばよいのか，学び方を身に付ける手だてにできるよう意図して作成した。

《「学習の手引き」（一部抜粋）》

－は・じ・め・に－

この学習の手引は，谷原中学校の生徒の皆さんの学習をよりよいものにするために作られたものです。今までの学習を振り返ったり，自分の良さや他の人の良さを見付けたりして，磨き合い，共に学ぶ方法を身に付けていきましょう。

学習の約束

1　チャイムが鳴る前に学習の準備をして席に着こう

2　授業に集中し、先生の説明を真剣に聞き課題に取り組もう

3　間違いをおそれず積極的に発表しよう

4　友だちの意見や考えをしっかり聞こう

5　予習・復習をしっかり行って授業に臨もう

教科	1週間当たりの時間数		授業への取り組み方
国語	4（1年） 3（2，3年）	授業前	・ノート，教科書を見直し前回の学習を振り返り，授業の見通しをもつ。 ・ノート上段に日付，教科書のページを記入する。 ・便覧，ワークを用意する。
		授業中	・自分の考えをもち，ノート下段に書いていく。 ・友達の考えで参考になるもの，板書で大切だと思ったこと等を中段に書く。
		授業後	・学習した大切な部分に囲みを入れたり，便覧などで調べたこと等を下段にまとめる。 ・「家庭学習の手引き」にしたがい，予習・復習をする。
社会	3（1，2年） 2～3（3年）	授業前	・教科書やワークを必ず読んでおく。
		授業中	・教科書に赤線を引き，要点をまとめる。 ・ノートの自主学習欄を活用し，学習内容をまとめる。 ・積極的に発表する－自分の考えをしっかりともつ。 ・資料などから分かったことを，自分の言葉でまとめる。
		授業後	・ノートやワークを活用し，学習を振り返る。（復習）
数学	4（1，3年） 3（2年）	授業前	・教科書，ノート，定規，分度器，コンパスの5点セットの用意。 ・教科書見開きページの予習。
		授業中	・ノートの使い方（大胆に余白をとる。途中の計算は消さない。）
		授業後	・ワークを利用した復習。
理科	3（1，3年） 4（2年）	授業前	・教科書をよく読んで，次の授業の学習内容を確認する。
		授業中	・観察や実験に協力して意欲的に取り組む。 ・教科書の重要語句はチェックして覚えておく。
		授業後	・授業で配られたプリントはノートにはって見直す。 ・授業で学習した内容はワークを使って復習する。
外国語（英語）	3（1→3年）	授業前	・忘れ物をしない。（教科書，ノート，ファイル）
		授業中	・恥ずかしがらずに，大きな声で発音する。 ・失敗を恐れずに，自分から進んで英語を話す。
		授業後	・授業で使用したプリントは，ファイルにとじて整理しておく。

② 「家庭学習の手引き」「家庭学習記録カード」の作成・活用

家庭学習の重要性や，規則正しい生活習慣が学力の向上につながることを資料と共に示し，家庭で保護者と生徒が共に活用できるものにした。また，各教科ごとに「継続して取り組んでほしい学習の仕方」や「テスト前の学習の仕方」を掲載し，家庭での活用を意図して作成した。

《「家庭学習の手引き」（一部抜粋）》

宿題の５つの意義

① 授業の復習・・・その日のうちの復習，習いたての繰り返しが効果的
② 授業の予習・・・前もって学習することによる定着度アップ
③ 学力の定着・・・「できる」ことから自信へ
④ 家庭学習の習慣づけ・・・生活のリズム
⑤ 我慢強さ・根気・集中力・・・精神力の育成

この時間を目安にがんばろう

学年	時間	場所	内容
中学1年	1～2時間	家の中で落ち着いた場所 いつも同じ場所	復習中心　自主学習の習慣化
2年	1.5～2.5時間		定期テスト短縮の計画・実践
3年	2～3時間		進路に向けて３年間の総復習

やる気を育てる　５つのかかわり

① 大きくほめよう　小さな成長
② 朝食で　体も頭も　元気にスタート
③ テレビより　家庭の対話　スイッチオン！！
④「～しなさい」で動く子より　自分で考え行動する子へ
⑤ 努力する親の姿が　子どもの鏡

国語科

☆さらに力をつけるために

○ノートの書き方を統一して，日付，ページ数は必ず記入する。
○ノートは大切な部分，自分の考えを区別して記入する。
○質問に対して必ず自分なりに考える。（脳を活発にする）
○資料集などを活用して知識を広げたり，深めたりする。
○小説だけでなくさまざまな分野の読書をする。（目標：年間３０冊以上）
○日記や詩集などの文章をたくさん書く。

☆テスト前の学習の仕方

○ノートの整理をする。（色を使って見やすく再整理，重要語句の再確認）
○ワーク，プリントの見直し。（文法，古文などは問題集の活用）
○漢字練習
○資料集で基礎的な用語を復習する。

《「家庭学習記録カード」》

「家庭学習記録カード」は，毎日提出し，担任がチェックするようにした。月末には，生徒が1ヶ月の取組を振り返り，保護者からコメントをもらう欄を作成した。各教科にどれだけの時間取り組んだか記入していくことで，学習している教科が偏っていないか，自分自身で気付けるようにした。

平成22年度　学習記録カード（12月）　組　番　氏名

自己目標：

日	曜	行事予定	学習計画	国語	社会	数学	理科	英語	その他	時間数
				時 分	時 分	時 分	時 分	時 分	時 分	時 分
1	水	期末テスト								
2	木	高齢者との交流会（1年）								
3	金									
4	土	授業参観・懇談・奉仕作業								
5	日									
6	月	振替休業								
		総時数								

1/1元旦　1/9私立高校推薦入試　1/10成人の日　1/11第３学期始業式・給食開始
1/12～13３年学年末テスト　1/24～26２年宿泊学習

今月の反省　　担任　検印

保護者から

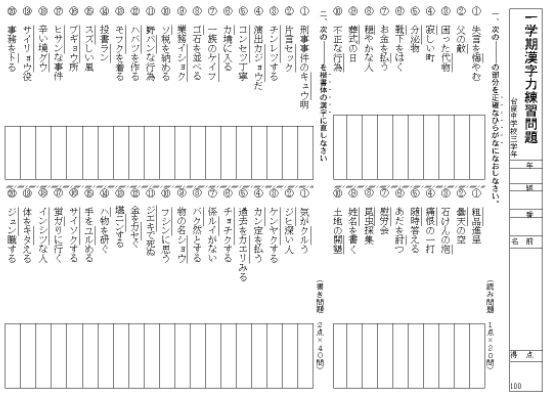
（２）国語科としての取り組み

① 家庭学習習慣の定着を視野に入れた基礎力テストの計画的な実施

漢字力テストを学期１回年間計画に明示し，さらに３学年では，慣用句テスト，

四字熟語テストなどの基礎力テストを約１ヶ月に一度実施した。その際には学年だよりで保護者にも伝え家庭での呼びかけを期待し，週３回は，家庭学習練習プリントを配布した他，毎時間家庭学習ノートを提出させ家庭学習で何をやればよいかを明らかにし家庭学習の習慣化を図った。

また，テスト後一週間以内に再テストを全員に行い，基礎学力の定着を図った。再テストで合格するものは，９割を超え生徒たちの自信につながった。さらに，同範囲から，中間や期末テストの問題も出題することを伝え生徒たちの学習意欲の向上を図った。



《漢字力練習問題》 → 《漢字力テスト》《漢字力再テスト》 → 《定期テスト》

② 生徒が学習の興味関心をもつ学習指導の工夫

小学校との連携の中で相互授業参観や協議を行い，小学校の授業展開や板書等で参考になる部分を中学校で取り入れるようにした。例えば，学習課題の提示を必ず行ったり，プリントや掲示資料，具体物など生徒が興味をもって学習に集中できるものを授業の中で少なくとも一つは準備するように心がけた。

また，ノートの下部に貼って確認できるような「基礎知識」のプリントを用意し，基礎基本の定着を図った。

さらに授業では，ワークシートを準備するようにし，少しでも学習に取り組めるように配慮した。ワークシートは，下位の生徒用にはヒントを与えたり教科書を見ながら穴埋めをしていくと学習が進められるようにし，中位の生徒には，ヒントと解答の根拠となる文のページ数を記すなどした。

（３）学習指導案

１　単元名　社会をとらえる　「メディア社会をとらえる」

２　単元の目標

○自分の生活や体験と比較しながら文章を読み、メディアとの関わり方を自分の問題としてとらえようとする。（関心・意欲・態度）

○展開に沿ってまとまりをとらえ、それぞれの部分で説明されていることを的確に読み取ることができる。（読むこと）

○筆者の説明や主張と自分の意見とを比較して読み、メディア社会の行き方について自分なりの意見を持つことができる。（書くこと）

３　単元設定にあたって

本単元は、メディアに対する関心を高めるとともに、それを一つの切り口として、現代社会や情報について理解を深めることを目指している。そして、そのためには、説明文を展開に沿って的確に読み取る必要がある。

本教材では、説明の内容や筆者の主張を一つの情報として相対化する読み方が必要となってくる。記述を無批判に受け入れるのではなく、自分の考えや経験と比較しながら読むことで、文章をより深く理解することができる。また、共感できるところ、できないところが明確になるため、自分の意見を確立するために手がかりにもなる。そうして読み取ったことをもとに、これからどのようにメディアと関わっていくか、主体的に考えさせたい。

４月に行った県学力診断テスト、説明的文章「読むこと」の本学級の結果は以下の通りである。

⑪熟語の構成について理解する力　61.3%	⑫指示する語句の内容を読み取る力　90.3%
⑬接続する語句を適切に用いる力　80.6%	⑭文脈に即して適切な語句をとらえる力　87.1%
⑮文脈に即して内容を的確に読み取る力　19.4%	

本教材では、全文の見通しを持ちながらも段落ごとに読み進め意欲を維持させながら読み進めていくようにしたい。また、補助的なワークシートも用意し上記⑮文脈に即して内容を的確に読み取ることが苦手な生徒には、本文の重要語句を押さえながら読み進められるように配慮していきたい。

４　指導と評価の計画

時	学　習　内　容	観　点　別　評　価　基　準		
		関心・意欲・態度	読むこと	書くこと
1	学習のねらいをつかむとともに、メディアについての関心をもつ。	「メディア」について知っていることを積極的に発言しようとする。	文章を自分の生活や経験と照らし合わせながら読み感想を持つことができる。	自分の生活や経験と照らし合わせながら書くことができる。
2	自分の身の回りにあるメディアの存在に気づき、メディアの定義と働きを読み取る。	自分の考えと筆者の考えを比較しながら意見や感想を持とうとしている。	メディアの定義と二つの働きについて文章から適切に読み取ることができる。	
3 本時	メディアを学ぶことに対する意識の変化を知り、近年その機運が高めってきた理由をまとめる。	メディアとの接し方について意識的には学ばれてこなかった理由を読み取ろうとしている。	学ばれてこなかったことと、学ぶことに対する意識の変化の理由を読み取ることができる。	
4	「メディアの読み書き」についての筆者の考えを読み取る。	自分もメディアの書き手であることに関心をもとうとしている。	「メディアを読む」ことの意味を、文章から読み取ることができる。	
5	メディアに対する筆者の考え方を確認し、メディアとのかかわり方について自分の意見をもつ。	学習したメディアの受信者、発信者としての意識を高め日常に生かそうとしている。	文章全体の流れを踏まえ、筆者の考え・主張を的確に捉えることができる。	友達と自分の意見を比較しながら意見をまとめることができる。

５　本時の展開

（1）目標

説明文の特徴を押さえて読み進めることで、本文のメディアを学ぶことに対する意識の変化を読み取り、近年その機運が高めってきた理由をまとめることができる。

（2）準備・資料

説明文の基礎をまとめたプリント　ワークシート（上位・中位・下位生徒用）　新聞（複数紙）
メディアの歴史年表　　コンピュータ・携帯の普及率を示したグラフ

（3）　展 開

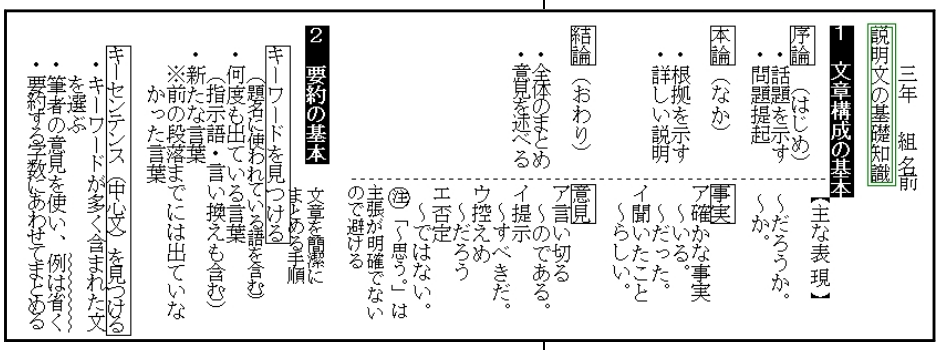
学　習　活　動・内　容	支援の手だて・評価（方法）
1　本時の学習課題を確認する。 なぜメディアについて、意識的に学ぶことが必要になってきたのだろう。	

・前時の学習の確認をする
説明の仕方の特徴について
序論・本文意味段落１にの内容について
「メディアの定義」
「メディアの働き」

○前時の学習の復習をすることで、集中できなかった生徒にも本時の学習に入りやすいようにする。

評【関】
メディアとの接し方について意識的には学ばれてこなかった理由を読み取ろうとしているか。(観察)

2　メディアについて「意識的には学ばれてこなかったもの」を読み取る。〈個人〉→〈4･5人グループ〉



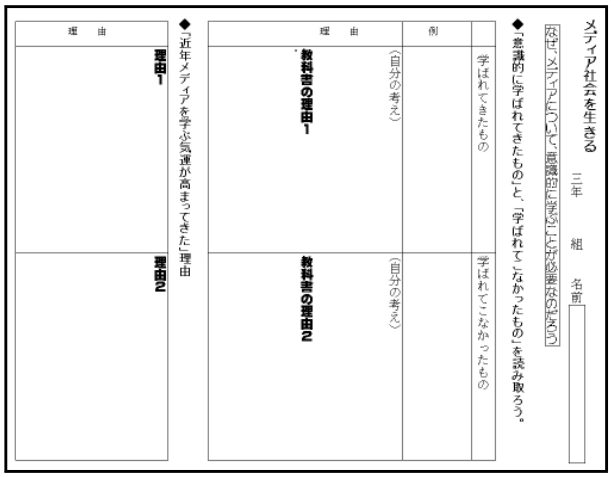
《基礎知識プリントの例》

・本文形式段落⑥を読み、手がかりになる言葉（何度も出てくる言葉に傍線、接続詞・接続語に四角囲み、例を表す言葉に丸囲みを書き込みながら読み取る。
傍線…「読み書き」「かき方」「鑑賞のしかた」「読み方」「作り方」「仕組み」「新聞」「テレビ」
四角囲み…このように
丸囲み……例えば

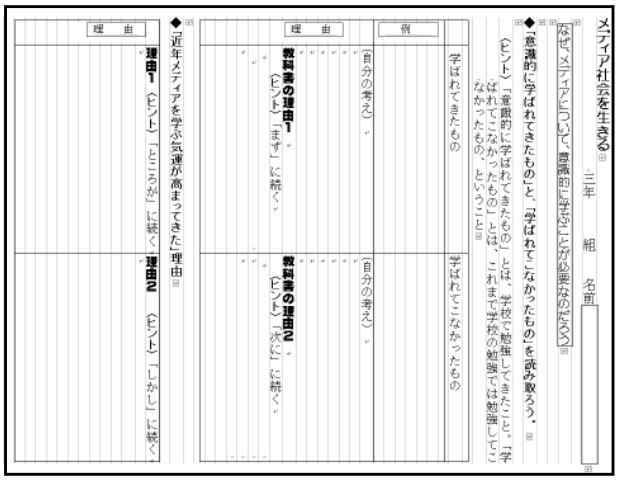
○「何度も出てくる言葉」は、説明内容の中心であること、「接続詞・接続語」は説明の流れを示していること、「例」は筆者の主張を分かりやすく説明していることを理解させ、読みの手助けとする。

○グループに入りにくい生徒には、声をかけ入りやすいようにする。また、どうしても入れない場合は、個人学習のみし、教師が確認するようにする。

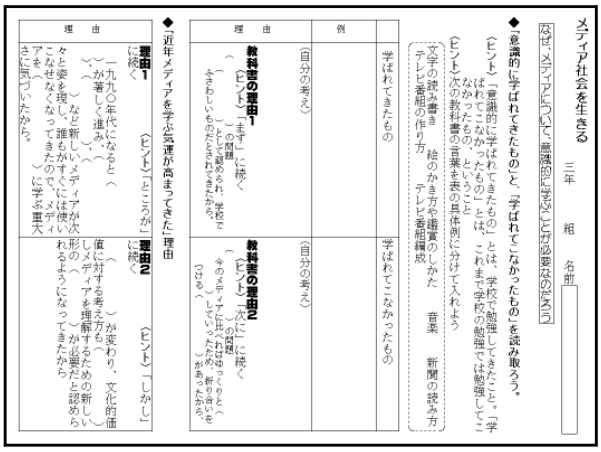
○読みの苦手な生徒には、ワークシートを用意し穴埋め式に読み取れるようにする。



《通常のワークシート》



《中位用のワークシート》



メディア社会を生きる　　三年　　組　　名前

なぜ、メディアについて、意識的に学ぶことが必要なのだろう

◆「意識的」に学ばれてきたものと、「学ばれてこなかったもの」を読み取ろう。

〈ヒント〉「意識的」に学ばれてきたもの　とは、学校で勉強してきたこと。「学ばれてこなかったもの」とは、これまで学校の勉強では勉強してこなかったもの、ということ

〈ヒント〉次の教科書の言葉を表の具体例に分けて入れよう

文字の読み書き　絵のかき方や複製のしかた　音楽　新聞の読み方

テレビ番組の作り方　テレビ番組編成

	例	理由
学ばれてきたもの	〈自分の考え〉	**教科書の理由1**　〈ヒント〉「まず」に続く （　　）の問題 〈ヒント〉（　　）として認められ、学校でふさわしいものだとされてきたから。
学ばれてこなかったもの	〈自分の考え〉	**教科書の理由2**　〈ヒント〉「次に」に続く （　　）の問題 〈ヒント〉「今のメディアに比べればゆっくりと（　　）していただいて、折り合いをつける（　　）があったから。」

◆「近年メディアを学ぶ気運が高まってきた」理由

理由
理由1　〈ヒント〉「ところが」に続く 一九九〇年代になると（　　）が著しく進み、（　　）など新しいメディアが次々と姿を現し、誰もがすぐには使いこなせなくなってきたので、メディアを（　　）に学ぶ重大さに気づいたから。
理由2　〈ヒント〉「しかし」に続く （　　）が変わり、文化的価値（　　）に対する考え方もつるための新しいメディアを理解する必要だと認められるようになってきたから

・読み取ったことを発表し、自分たちがメディアに対する知識やスキルをどのくらい持っているか考える。

←《下位用のワークシート》

○同日の複数紙の新聞を示し、一面の扱い等について具体的に考えさせるようにする。

3　「近年メディアを学ぶ気運が高まってきた」理由を読み取る。**〈個人〉→〈4･5人グループ〉**

○２で学習した方法を使い、筆者の説明と主張を区別して読み取ることができるようにする。

・本文形式段落⑦～⑩を読み、２と同様に手がかりになる言葉（何度も出てくる言葉に傍線、接続詞に四角囲み、例を表す言葉に丸囲みを書き込みながら読み取る。

傍線……「学ぶ」「問題」「学問」

四角囲み…しかし　まず　ところが　次に

丸囲み……例えば

○読み取った生徒には、筆者の主張を短くまとめるように促す。

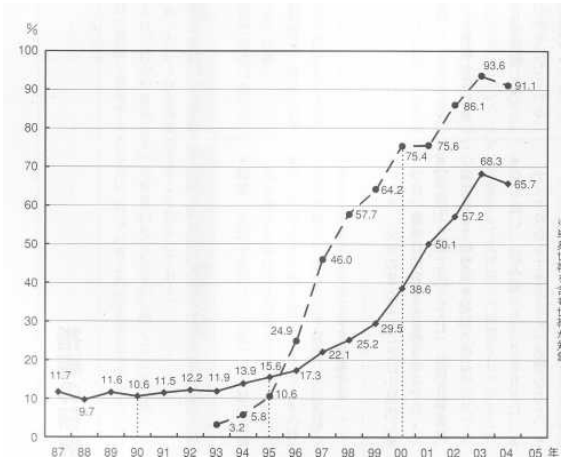
・読み取ったことを発表し、メディアを学ぶ気運の高まりに対して考えを持つ。

○「テレビの歴史」年表と「コンピュータ・携帯の発達」のグラフを示し、その関連を読み取らせるとともに自分の考えをもてるようにする。

《テレビの歴史》

一八七三年（明治六年　イギリスのスミスとメイがテレビジョンの開発を開始
一八七五年（明治八年　アメリカのアクリー、多線式テレビジョンを考案
一八八四年（明治十七年　ドイツのニプコー順次伝送方式のテレビジョンを開発
一九二五年（大正十四年　イギリスのベアード、公開実験に成功
日本でテレビジョン研究開発開始
一九三七年（昭和十二年　アメリカのベル研究所、テレビ公開実験に成功
一九三八年（昭和十三年　イギリスのベアード、初のカラーテレビ実験に成功
一九三九年（昭和十四年　アメリカのWGY局がテレビジョンの実験放送を開始
一九三五年（昭和十年　アメリカのツウォリキン、実用的な受像管「アイコノスコープ」を発明
一九三六年（昭和十一年　イギリス・ドイツ・フランスで本放送が開始
一九四一年（昭和十六年　日本でテレビ放送実験成功
一九五三年（昭和二八年　日本でテレビ放送開始
一九六〇年（昭和三五年　NHKと民放四局がカラーテレビの本放送をスタート
一九七二年（昭和四七年　NHK総合テレビが全番組カラー化
一九八三年（昭和五八年　NHKが東京・大阪で文字多重放送開始
世界初の液晶カラーテレビを開発、世界初のTFT液晶テレビ、
一九九一年（平成三年　エプソンが液晶ポケットカラーテレビ
一九九二年（平成四年　朝日放送が初のハイビジョン生中継（試験放送）を全国高校野球大会にて実施、
二〇〇三年（平成十五年　放送衛星「BS３a」「BS３b」が打ち上げられる
富士通ゼネラルの藤田博が世界初のプラズマテレビを開発、「蛍」の字を表示させる。
二〇〇四年（平成十六年　東京、名古屋、大阪の３大都市圏でNHK、民放一斉に地上波デジタル放送開始
二〇〇六年（平成十八年　茨城、富山で地上波デジタル放送開始
二〇〇九年（平成二一年　移動体受信機向けの地上デジタル放送、通称「ワンセグ」開始
二〇一〇年（平成二二年　３Dテレビ発売（メガネあり　４月・メガネなし　一二月）
二〇一一年（平成二三年　地上波アナログテレビ終了（予定）

《テレビの歴史》



4　本時の読み取りの確認と説明文の読み取り方の確認をする。**〈個人〉→〈全体〉**

評【読】

メディアとの接し方について学ばれてこなかったことと、

学ぶことに対する意識の変化の理由を読み取ることができたか。

（発表、ノート、ワークシート）

③　テキストを読み表現する場面を多く設け，読解力を高める指導の工夫

「相手を意識して伝えよう」の教材で「纏（まとい）」の説明文を読んで纏がどのようなものであるか，小学３年生向けにを書き直す学習以降，テキストを読んで相手を意識して書く学習をできるだけ取り入れた。

授業例の中では，「テレビの歴史」年表と「コンピュータ・携帯の発達」のグラフを示し、その関連を読み取らせるとともに自分の考えをもてるようにした。

また，その他の例では，京都への修学旅行に向けて「川床」や「水天宮のなで牛」についての複数の資料から，小学３年生に説明する原稿を書かせたり，「新聞の特徴を生かして書こう」の教材では，「朝日新聞」のワールドカップサッカーでの日本の活躍を伝える記事をテキストととして示し，見出しやキャプチャ，ふさわしい写真を考えさせその理由を示す学習などを取り入れた。

《新聞の特徴を生かして書こう》

《「なで牛」を説明しよう》

4　研究の結果

(1)　仮設(1)について

学習する内容と学習の仕方を明確にし，生徒が関心意欲を持てそうなテキストをタイムリーに提示することで，生徒の「学ぶ意欲」を高め学習の見通しをもって取り組むことができた。全校生徒に実施し，「学習の手引き」「家庭学習記録カード」の活用状況を把握した結果，「学習の手引き」を，70％以上の生徒が活用していることが分かった。利用している生徒がわずかに増加したといえる。

平日の家庭学習時間は，「全くしない」「30分未満」の生徒が減少し，１時間未満，２時間未満の生徒が増加した。少しずつでも学習する習慣が作られてきた結果だと考える。第３学年では「全くしない」「30分未満」は０％になった。

ワークシートを利用することで，授業に臨む態度の向上が見られた。下位の生徒もプリントに取り組むようになり，完成した際には褒め励ますようにしたところ自信を示し，基礎力テストに意欲的に取り組むようになっている。また，基礎力テストを計画的に行ったところ生徒は，再テストや定期テストまでの中でやる気を出し，再挑戦しながら自信を示すようになってきている。

（２）　仮設(２)について

11月に実施した「総合学力診断のためのテスト」の結果からは，ほとんどの分野で正答率が上がり，理解できている生徒が増えた。内容の大体は読み取れているが，キーワードを使って文意が通るように記述する力がまだ十分ではなかった。また，放送

問題では，簡潔に考えをまとめて書く力が十分に付いていないことが分かった。授業の中で，キーワードを使って200字程度に要約する学習活動を行ったり，２～３文で簡潔にまとめたりする学習を継続していく必要があることを確認した。４月よりも記述問題を空欄にしない生徒が増えた。書くことを厭わずに取り組む生徒が増えてきたことを賞賛し，学習活動への意欲が高められるようにした。

説明的文章の授業では，「何度も出てくる言葉」「接続語」「例」などを押さえて文脈に即した内容を正確に読み取る力を育てようと意図した。その際，「なぜ何度も出てくるのか」「逆接の接続詞のあとにはどんな筆者の考えがくると思うか」「例はなぜ必要なのか」等を考えさせることにより，こうした語句を押さえることによって論理的展開が理解されやすくなった。

また，書く授業の中では，「５Ｗ１Ｈ」を繰り返し押さえたり，テキストから必要な情報を選び出す学習を繰り返したりしたことで，資料を読む抵抗が薄らぎ，根拠や理由を書くことができる生徒が増えてきている。さらに，タイムリーなテキストを扱う学習を通して意欲をもって学習に臨むことができたとともに，最後までやり遂げる生徒が増え，読解力も高まってきた。

５　今後の課題

今回の実践は，学校全体の課題研の中で「確かな国語力を育むための国語教育の在り方」を考え実践した事例である。本校の実態の場合，確かな学力を育むためには，国語科一教師の実践だけでは限界がある。そうした意味で，教職員が小学校とも連携し「生徒の学ぶ意欲を高め，確かな学力を身に付け」させたいと取り組んできたために成果が見られ始めたといってよい。

実践は，これまでにも何度か繰り返し指導してきたが身についていない部分である。今後もねばり強く改良を加えながら実践していく必要があるだろう。説明的文章の読み取りでも，生徒たちが日常の中で無意識にそうした方法を採り文脈を読み取れる力となるように，繰り返し教材などを工夫しながら指導していく必要があると考える。そして，しっかり内容を理解したうえで，自分の考えをもてるようにしていきたい。

ワークシートを利用することで，生徒は自分にあったシートを選択し見通しをもって学習に臨むようになった。しかし，まだわからないとすぐに諦めたり終わると話し始めたりといった行動が見られる。その後の発表には意欲的であるが，自分の意見を示したことで満足し他の生徒の意見を聞き，考えを深めるという楽しみを十分に味わえるまでには至っていない。自分の考えを他人とすりあわせることで練り上げていく経験を増やしていく必要がある。

今後もこうした実践を継続していくことで，生徒の「生きる力」を身につけさせていきたい。